

「京都印刷発祥之地の記念碑」由来



■探索の始まり

数年前に、「京都で印刷を創始したと思う会社の場所を覚えている。確認が必要だが、古い事は確かなので教えておきたい」とのお話をいただき、これが、京都印刷発祥の地を求める旅の始めとなった。

京都の印刷の歴史をたどると、百万塔陀羅尼に象徴される木版刷（一説には金版刷）から始まり、木製活字や合金活字の変遷を得てやがて鉛合金地金の活字を完成させ、三大発明の一つ「印刷」の本格的始動の時代を迎える。活版印刷は大量の情報の発信が可能となり、文化の発展、伝播に大きく貢献するのであるが、印刷そのものがまさに文化である。

■京都での嚆矢となった印刷会社とその場所

ご承知のように、日本での近代印刷の発祥は、長崎の本木昌造先生が活字作成に色々な経験を積みながら明治3年47歳の時、新町活版所を設け本格的活版印刷を始めた事で幕を開ける。

近代印刷の創始者である本木昌造先生は、京都においても印刷業の普及に力を注がれ、先生の門人古川種次郎を派遣し、明治3年（1871）12月に京都に點林堂を開業したと文献に記されている。

京都府、京都府立資料館に出向いて調べた範囲では、京都における近代印刷技術による印刷物の最古のものは、京都府立資料館にある明治10年4月20日の「平安新聞」であり、奥付は西京河原町三條上ル二丁目下丸屋町第四百廿六番地「煥文堂」とある。

また、京都府立資料館にある明治21年9月24日出版「京都府官報」京都府蔵版 京都府庶務課編纂 印刷兼発売では「點林堂」とあり、その住所は上京区第廿八組烏丸三條北場（原本では場）之町三十三番戸とある。印刷物では「煥文堂」の方が古いですが、嚆矢となる印刷所「點林堂」の場所を探していることからすると、その場所は「上京区第廿八組烏丸三條北場之町三十三番戸」と断定できると考えた。

■記念碑設立までの経緯

記念碑の設立には、京都府、京都市、場之町御町内会、当組合顧問の参議院議員西田昌司先生を始め多くの方々のご協力を頂いた。京都府では、特に「商工労働観光部経営支援課」にお世話になり、多くの資料紹介を頂いた結果、點林堂という会社及び住所に行き着くわけである。

次に「上京区第廿八組烏丸三條北場之町三十三番戸」の場所の選定を急いだ。場所の確定には、京都市では特に「産業観光局産業振興室」にお世話になった。そして記念碑が設置できる場所として、候補地の公私種々の場所からの選定にご尽力いただき、その結果、「上京区第廿八組烏丸三條北場之町三十三番戸」に一番近いところとして、京都市営地下鉄烏丸御池駅構内へ建立させていただくことになった。勿論、京都市交通局のご理解、ご協力を頂いた結果であり、厚く御礼申し上げなくてはなりません。

■記念碑の説明

記念碑は活字を模し、背景の絵は木版、右の説明は未来の印刷となる3Dと、過去から未来総てを含めたモニュメントである。

「京都印刷発祥之地」の石碑

株式会社石俊 山本石材店（左京区一乗寺東浦町）と相談して進めた。まず、全体の形は、活字を模する事とした。ネッキという半円の溝を碑の下部に造った。溝がある方が活字を並べた時の下側となる。「京都印刷発祥之地」の文字は、活字にちなんで通常とは逆文字になっている。長崎にも同様の逆文字の碑がある。

頭部の「京」の字も逆文字になっている。台座は1m×2m（特級錆系御影石）、記念碑の高さは1.6m、40cm角（特級黒御影石）、謂れの碑高さ53cm（特級緑系御影石）である。また、この台石の下には、字母（活字の母型）が埋めてある。活字は、活字鑄造機にこの字母を取り付け、鉛を主にした活字地金を流し込んで作成する。京都光学製版という団体から寄贈を受けた。

「背面の絵画」と説明面

京都造形芸術大学の藤井秀雪先生のご尽力により、関本徹生教授に産学協同事業として完成して頂いた。

一面の大きさ横1100cm、高さ2400cm。三面に先生の絵画、もう一面に3Dも組み入れた今回の記念碑の説明という構成になっている。

<左側のツゲと浮世絵について>

活字はツゲの木でも作成していた（活字の字母の元になる父型もツゲで作成）。そして刷り物として広がったのが浮世絵を代表とする木版画。芸術文化は高尚なものではなく、一般書庶民の日常生活の中に、まさしく目と鼻の先にあった。それらを示唆したのが媒体（印刷物）である。

<左側から2番目：プラタナスと鐘馗について>

プラタナスは平和の木。鐘馗は魔物を追い払う。印刷発祥の地は平安京内裏からみて、辰巳（南東・立夏）の方向。辰は木気の終わりであり、陽気動き、雷がきらめき、振動し、草木が伸張する状態、そして巳は火気の始まりで万物が繁盛の極になった状態である。力強く伸び進んでいく、そんな地に存在した。現在の御所から見ても南であり、火気の真中（午）、夏を表している。

<左から3番目：アオギリと鶴について>

広島に原爆が投下された時、生き残っていたのがアオギリの木、その生命力、子孫繁栄力、平和を願う力の源は愛の力である。愛を広く伝える力は言葉（言霊）であり、芸術（文化）であり、媒体（印刷物）でもある。

「背面の絵画」と説明面

京都造形芸術大学の藤井秀雪先生のご尽力により、関本徹生教授に産学協同事業として完成して頂いた。

一面の大きさ横1100cm、高さ2400cm。三面に先生の絵画、もう一面に3Dも組み入れた今回の記念碑の説明という構成になっている。

<左側のツゲと浮世絵について>

活字はツゲの木でも作成していた（活字の字母の元になる父型もツゲで作成）。そして刷り物として広がったのが浮世絵を代表とする木版画。芸術文化は高尚なものではなく、一般書庶民の日常生活の中に、まさしく目と鼻の先にあった。それらを示唆したのが媒体（印刷物）である。

<左側から2番目：プラタナスと鐘馗について>

プラタナスは平和の木。鐘馗は魔物を追い払う。印刷発祥の地は平安京内裏からみて、辰巳（南東・立夏）の方向。辰は木気の終わりであり、陽気動き、雷がきらめき、振動し、草木が伸張する状態、そして巳は火気の始まりで万物が繁盛の極になった状態である。力強く伸び進んでいく、そんな地に存在した。現在の御所から見ても南であり、火気の真中（午）、夏を表している。

<左から3番目：アオギリと鶴について>

広島に原爆が投下された時、生き残っていたのがアオギリの木、その生命力、子孫繁栄力、平和を願う力の源は愛の力である。愛を広く伝える力は言葉（言霊）であり、芸術（文化）であり、媒体（印刷物）でもある。

※各絵に点があります。ご確認ください。

<記念碑の説明面について>

右端は美濃商事株式会社（中京区西洞院通二条上る）にご協力により、次世代の印刷となる3Dでタイトルを作成している。

<「京すりもの」のタイトルと地図>

航空写真の上にある線は、京都地方法務局にある町の古地図を元に作成した。年代は不詳とのことだが、おそらく明治6年の地租改正の頃ではないかと思われる。場之町町内会様ご所有の古地図を参照させていただいたが、この地図の作成時期と思われる明治8年10月の区分けとよく似ている。

■ご協賛団体

今回の記念碑建立には、以下の三団体よりご協賛頂いた。京都光学製版様には活字字母も提供して頂いた。

京都府頁物印刷協議会 京都印刷協和会 京都光学製版

■設置場所

「京都印刷発祥之地」の石碑は、京都市地下鉄烏丸御池駅構内に建立されている。

（組合顧問 吉川 宣治氏の寄稿文（京印季報平成22年盛夏号）から抜粋）